ENTERTAINMENT

アメリカ映画人気の秘密は娯楽(エンターテインメント)仕立ての勧善懲悪

高野てるみ　巴里映画代表

写真／Bourguard-EPA-Stills／Imperial Press

フランス映画の配給を手がけている立場ではあるが、アメリカン・メジャーのエンターテインメントもの、大好きである。『スター・ウォーズ』や『インディ・ジョーンズ』シリーズは欠かさず観ているし、それも一度ということはない。『スター・ウォーズ』なんかは公開中何度も観に行き、公開後はビデオで朝から観て、セリフまで覚えてしまうほど、愛好した。

この手のアメリカンなテイストの作品は、ひきも切らず目白押しで、いつも大入り満員、ビッグ・ヒット、ビッグ・サクセスを獲得する。

『インディ・ジョーンズ　最後の聖戦』の後、日本でも前評判が高く、公開が待たれているのが『ゴーストバスターズII』、そして、もちろん、あの『バットマン』。

だいたいがアメリカン・メジャーの作品って、いい加減うんざりするくらい、〝空前の〟とか〝映画史を塗り変えた〟とかのうたい文句をくっつけて語られるものだから、こっちもスレちゃって、信用しないし、驚かなくなっている。真偽のほどは、自分の目で確かめてみて、という姿勢にはなってきていますよね。

いかなるSFXを駆使しようとも、そうそうは感激しなくなって、そういう観客たちが、

「フランス映画って、こう、ナンツーか、後の余韻が違うんだワー」

なんて、勝手におっしゃって、手前どもが配給する名画に感動して下さるのは、とてもアリガタイことでもある。

そうは言っても、今度の『バットマン』の〝史上空前の〟は、まやかしではなさそうだ。封切後2週間で1億ドル以上の興行収入を得て、平均6ドル前後のアメリカの入場料で勘定するならば2千万人近くの人間が確かに観ていることになる。全米広しといえども、なんたる動員力であろうか。

で、分析好きの日本人は、すぐにその要因を考えるのがお得意だったりして、スーパーマンが生身の人間ではなかった点、バットマンは昼は㊎のインテリであるから親近感がわく、とか、原作のアメリカン・コミックがデビュー以来50年目にあたり、親子三代にわたる知名度があるからなんて、もっともな理由をつけたがるが、どうだろうか。

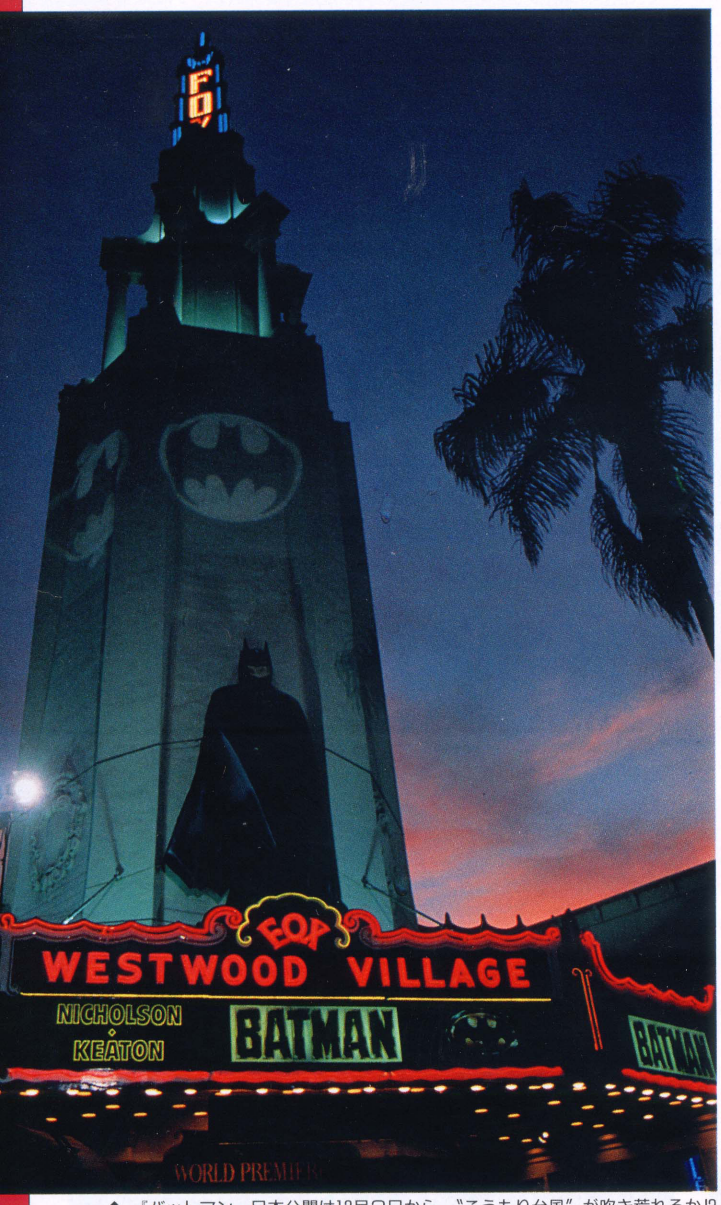
『バットマン』に限らず、『インディ――』とか『スター・ウォーズ』『ゴーストバスターズ』などの活劇は、正義は必ず悪に勝つ、という古典的で単純明快なストーリーが身上である。

で、正義とは神、悪とは悪魔のことであると思う。ロケットやミサイルを作っちゃう世界一のパワーを持つアメリカ人の、ああいつも明るく元気な精神は、とりもなおさず、彼らの篤(あつ)い信仰心に支えられていると思う。彼らにとっての〝神様〟は、ほとんどの場合キリストなのであろうが、そこはいろいろに擬人化して楽しんでしまうのが、アメリカ人。そこで、常に新しいヒーローの登場に期待するわけだ。

特に最近のように人間不信がつのり、人間が人間らしさを失いがちな、文明が進歩しすぎた時代には、白黒はっきりとした希望的結論を与えてくれるような正義のヒーロー大活躍ものが、人々をホッとさせ、明るい明日を暗示してくれるから、キャラクターのあるヒーローものは、ますます歓迎される。

考えてみれば、アメリカの人々は、世界各国からの血が入り混じった複合混合種族である。彼らが作った作品が、全米のみならず全世界で大ヒットするのも当然のことではないか。

何だかんだ言ったって、映画を発明したのは我が国ダヨ、とのたまうプライドの高いフランスでも、ここのところの興行成績ヒットチャート上位は、ほとんどアメリカ映画に占められている、そんな実情も認めざるを得ないのである。



⬆『バットマン』日本公開は12月2日から。〝こうもり台風〟が吹き荒れるか!?

たかの　てるみ　巴里映画代表／エディトリアル・プロデューサー。第3回東京国際映画祭では、フランスのジャン・ジャック・ベネックス監督のインタビューを行うなどしてフランス映画界との親交を深めた。好きな作品なら自社配給でなくとも身を入れてしまうという根っからの映画好き